

秘

昭和十七年十一月

蔣共新聞雜誌論調(第一號)

洞三

在北京日本大使館別館調査案

調
17.12.10

目次

一、新情勢ト新認識……………	李 宗 仁……………一頁
二、日本戦時經濟政策ヲ論ス……………	柳 松 光……………二〇頁
三、日本ノ鐵蹄下ヨリ宗教ヲ解放セヨ……………	晋察冀日報社説……………三八頁

新情勢ト新認識

李 宗 仁

(大分報八月十六日所載)

我國ノ神聖ナル抗戰カ滿五週年ヲ迎ヘル時ニ當リ國內戰場ニ於テハ日本ノ足搔ノ取レナクナツタ軍兵カ又モヤ四方ニ手ヲ伸シ我カ浙贛ニ向ツテ猪突的ナ進撃ヲ開始シタ。彼等ノ企圖スル最モ大キナ目的ハ我カ浙西空軍基地ヲ牽制シ以テ我カ航空部隊ニ依ル最モ有效爆發半經内ニアル敵國本土襲撃ヲ回避セントスルニ在ルヲテアツテ浙贛路ノ開通ノ如キハ第二義的ナ目的ニ過キナイ、太平洋方面ニ於テ日本ノ兵力ハ既ニ「マレー」半島及ヒ廣範圍ナル南洋太平洋ノ諸島嶼ニ分散サレ、兵ヲ深入リサセ過キ警備面過大トナリ、シカモ力量カ分散スルト言フ誤ヲ犯シタ、從ツテ當然印度大陸及ヒ遠洲本土ニ向ツテ大規模ナ冒險的進撃ヲ起ス餘力カ無クナリ、單ニ其ノ海軍力ニ輕ツテ小規模ナ襲撃ヲ試ミ得ルニ過キナクナツタ

珊瑚海ノ一戰ニ於テ日本海軍ハ慘敗ヲ喫シ、繼イテ「ミッドウェー」

島及ヒ蘭印港ノ襲撃ニ於テモ亦勝利ヲ獲得出來ナカツタ、珊瑚海々戰ヨリ「アリニューシヤン」群島ノ海軍迄ヲ綜合スレハ僅々四十一日間ニ敵軍艦ノ損失ハ既ニ六十隻ニ對シ殊ニ空軍ノ損失ハ悲慘ヲ極メテヲリ敵ハ少數ノ陸戰隊ヲ「アツツ」島(熱田島)ニ上陸サセ西半球ノ門戸ニ足ヲ踏入レタトハ謂ヘ、シカシソノ目的ハ亦僅カニ米空軍ノ日本本土空襲ノ足場ヲ遮斷シテ自己ノ安全ヲ計ラントスルニ在ルニ過キス、極東ト太平洋ノ全般的形勢ヲ觀察シ軍ニ客觀的事實ヲ以テ分析シテ見レハ日本ハ既ニ自動的政勢ノ地位ヨリ受動的守勢ノ形態ヘ轉落スルノ余餘ナキニ迫ラレテヲリ少ナクモ目下ノ所如何ナル方面ニモ大規模ナ政勢ヲ取ル可能性ハ絶無トナツタ

歐洲方面ニ在ツテハ「ナチス」獨逸カ其ノ神聖戰ト言フ常套手段ヲ以テ喧シク春季攻勢ノ宣傳ニ大奮トナツテヲリハ今ヤ其ノ主力ハ既ニ「クリミア」半島ノ南部及ヒ「コーカサス」一帯ノ地ニ於テ相當激烈ナル鬭爭ヲ展開シテキルカ、シカシ「ナチス」ノ此ノ攻勢ハ事

實ニ於テ昨年ノ冬季前「ナチス」カ東歐ニ於テ行ツタ五回ノ總攻撃
及ヒ「モスクワ」周邊ノ殲滅戰ニ發揮シタ威力ノ如キ猛烈サニハ遠
ク及ハナイモノテアル。「ナチス」カ全力ヲ擧ケテソノ準備ニ數ケ
月ヲ費シ如何ニ犧牲ヲ拂ツテモ結局ソノ得ル所ハ單ニ僅少ナル一角
ノ爭奪戰ニ過キナイ、之ヨリシテ「ソ」聯ノ潜在力ノ強大サト戰フ
ニツレテ益々強クナルコトハ動カス事ノ出來ナイ事實デアルコトヲ
證明スルコトカ出來ル

シカシ乍ラ此ノ民主陣營ト樞軸國家群トノ全面的戰爭過程ニ於テ我
カ同盟國ノ多クノ人々ノ心理ハ余リニモ歐洲戰場ニ於ケル一城一地
ノ得失ヲ過大視スル傾キカアリ獨逸ノ優勢サヲ過大ニ見積ツテ「ソ」
聯ノ偉大ナル抵抗カト堅忍不拔ノ革命精神トヲ輕視シテキル、斯カ
ル誤レル觀念ハ實ニ「ナチス」ノ神經戰術タル牛ヅ宣傳ヲ以テ勝ヲ制
スルト言フ脆計ニ乘セラレタモノテアル

「ソ」聯ハソノ國土歐亞ノ二大洲ニ跨リ全地球ノ六分ノ一ノ土地ヲ

占メ居大ナル人カト極メテ豐富ナル天然資源トヲ藏シテキルノデア
ツテソノ第三次五年計劃ノ成果ニ於テ蘇聯ノ自給自足率ハ既ニ相
當ナル高度ニ達シテアリ戰爭條件中重要ナル地位ヲ占メル人的資源
物的資源ニ就イテ言ヘハ共ニ獨逸ニ比シテ優勢テアリ且ツ「ソ」聯
ノ民衆ハ革命政權ノ指導下ニ於テ既ニ二十余年ノ長期訓練ヲ經テ來
テアリ、祖國ヲ護リ勝利ヲ獲得スルノ信念ト決心トヲ有セサル者ハ
ナイノデアアル。「天ノ時」「地ノ利」「人ノ和」此ノ三ツノ勝利ノ
條件ニ就イテ言ツテモ「ソ」聯ニハソノ總テカ備ツテキル、加ルニ
「ソ」聯人民ノ民族意識ノ強烈ナルコトハ更ニソノ「ナチス」ニ對
スル抵抗ノ必然的勝利ヲ保證シテキル

然ルニ我々民主陣營ニ於ケル數多クノ人々ハ其ノ思想ト言論トニ於
テ往々樞軸第五列ノ欺瞞ニ氣付カス常ニ「ナチス」ノ爲ニ「デマ」
宣傳ノ役ヲ務メ樞軸側ノ虛聲恫喝ノ援助者ト異ナラナイ事ヲナシテ
キルノハ誠ニ奇怪至極デアル、試ニココ數年間ニ於ケル樞軸側ノ侵

略ニ對スル民主國家ノ對策振リヲ見ルニ何時モ狼狽ニ時ヲ過シ對應策ニ當ラ失シテ侵略者ニ乘スル機會ヲ與ヘ戰禍蔓延シテ收拾ノ着カサル局面ヲ招致シテ來タカ、其ノ病源ヲ追求スレハ實ニ普魯見ラレル病的心理ニ崇ラレテノ結果ニ外ナラス、此ノ病態ハ歐米ニ於テハ「恐獨病」ト名附ケ得ヘク中國ニ於テハ「恐日病」ト名附ケ得ル。恐獨病者ハ往々ニシテ獨逸ノ裝備ノ優秀ヲ其ノ測リ知レナイ深遠ナル神秘的戰術トヲ過大ニ評價シテ恐怖ニ陷ルノテアル故ニ獨逸ノ戰局ヲ論スルニ直チニ「フランス」ノ濫殺ヲ例ニ舉ケルノテアル。シカシナガラ國土狹小ニシテ人心一致セス兵士志ナクシテ政治腐敗セル「フランス」ヲ以テ土地廣大ニシテ民族團結シ兵ノ勵志旺盛ニシテ政治ノ行キ届イテキル「ソ」聯ニ此スルコトハ大ナル誤謬ヲ犯スコトテアル。昨冬「モスクワ」「レニングラード」カ危機ニ瀕セル際我カ同盟國側ノ多クノ人々ハ大イニ不安ヲ感シ、此ノ時局ヲ杞憂シ或ル者ハ「モスクワ」「レニングラード」ノ陷落ハ旦夕ノ間

ニ迫ツタト謂ヒ甚タシキニ至ツテハ「ソ」聯ハ「ナチス」ノ狂暴ナル攻撃ニ堪ヘカネテ城下ノ閉ヲ結フノテハナイカトノ疑ヒヲ抱ク者モアツタ。然ルニ事實ノ變轉ハ遂ニ斯カル觀察者輩ノ驚表外ニ出テタ、シカシ現在「ナチス」ノ攻勢カ既ニ一頓挫ヲ來シテキルトハ斷ヒ乍ラ英米人士ノ狼狽振リハ依然トシテ消エス從ツテ總テノ者カ獨「ソ」聯戰線ノ變化ニノミ注視シ、太平洋戰爭ノ重要件ヲ輕視シテ日本ノ橫行スルニ任シ同盟國ヲ不利ナ立場ニ立チ至ラシメテキルカ之ハ誠ニ切齒扼腕ニ耐ヘサル事テアル。恐日病者ニ至ツテハ一冉ナラス日本ノ西進論ヲ甚キチラシテキタカ其ノ見解ノ誤謬ハ前者ト同一ノ轍ヲ踏ムモノテアル、太平洋戰爭カ未タ勃發セス日米會議カ尙未タ決裂セサル時ニ於テ日本ノ侵略方向ハ南進北進若シクハ西進ノ三方面ヲ豫測スルコトカ出來タ、余ハ國際間ノ趨勢ヲ觀察シ、樞軸側ノ日ト共ニ加ハル聯合的侵略ハ反ツテ民主國家群ノ一致團結ヲ促進スル結果トナリ雙方ノ勢力ハ深刻ナル

對峙ヲナシ、戰爭ノ範圍ハ必然的ニ擴大サレルカ故ニ、日本ハ迅速ニ英米ノ封鎖線ヲ突破シ西南太平洋ノ奢望ヲ持メンカ爲ニ斷乎獨伊ト協同作戰ヲ行ツテ南進ノ冒險ヲ決行スルテアラウコトハ、國際戰爭ヘ變轉スル必然的過程トシテ十分豫測スルコトカ出來タ。
日本ノ南進ノ原因ヲ綜合シテ見ルニ次ノ諸點ヲ擧ケルコトカ出來ル即チ英國カ歐洲ニ於テ事ヲ權ヘ東亞迄顧ミル餘力無ク、米國ノ擧重亦未タ完成セサルニ乘シテ英米「オランダ」ノ太平洋ニ於ケル殖民地理ヲ攻略スルハ實ニ千載一遇ノ好機テアルト認メタコトカソノ一テアル、日本ハ中國侵略戰ニ就イテ既ニ足掃キカ取レナクナツタモノテアリ、速戰速決ヲ以テ中國征服ヲ達成セントシタ企圖ハ既ニ水泡ニ歸シタ事ヲ深ク認識シ、更ニ尙英米カ其ノ經濟勢力ヲ動カシ斷乎トシテ經濟封鎖ヲ實行シ、日本カ疲勞困憊シテ屈服スルヲ待ツテキルコトニ鑑ミ日本ハ日ト共ニ情況不利トナリツツアル今日、坐シテ死ヲ待ツ事ニ甘シ得ナイ以上、唯タ南進ノ冒險ヲ敢行シ英米ノ封鎖

線ヲ突破シテソノ長期戰ノ戰爭力ヲ維持シ得ルコトヲ悟ツタコトカ其ノ二テアル。日本カ既ニ樞軸同盟ニ加盟シテキル以上獨伊ノ勝敗ハ亦日本ノ勝敗テアツテ苦樂ヲ共ニシ、其ノ朋友ノ歐阿二洲ニ對スル攻勢ヲ助ケル意味ニ於テ英米ノ力ヲ太平洋ニ牽制スルコトハ朋友ノ立場トシテ當然果スヘキ義務テアルコトカソノ三テアル。北進シテ「ソ」聯ヲ攻撃スルコトハ固ヨリ日本ノ重要ナ一目標テハアルカシカシ「ソ」聯ニハ潰滅ノ色モナクシカモ西伯利亞ニハ莫大ナル兵力カ控エキル、假令東西ヨリ「ソ」聯ヲ夾撃セント目論シテモ西方ヨリノ距離カ余リニモ遠ク樞軸側ノ企圖ハ到底達セラルヘクモアラス且ツ沿海各省ノ資源ハ遠ク南洋諸島ノ資源ノ豐富サニ及ハナイ、若シ西方ニ向ツテ中國ヲ攻略セントシテモ武力ヲ以テハ征服スルコトカ出來ス政治的手段ニ依ル陰服勸告モ亦失財ニ終ツテキル今日此ノ狀態カソノ「ソ」聯ヲ推移スレハ死地ニ陥ルノ外ハナイ、故ニ日本トシテハ彼自身ノ利害ノ爲ニモ樞軸側盟邦ノ勝利ノ獲得ノ爲ニモ南進ノ

冒險ヲ敢行シテ死中ニ活ヲ求メルヨリ外取ルヘキ手段カナカツタノ
テアル。

然ルニ當時多クノ人々ハソノ余リニモ主觀的ニ偏シタ見解ニ誤ラレ
日本ハ必ス英米ト妥協シテ中國征服ノ目的ヲ達スルテアラウト應測
ヲ下シテキタ。太平洋戰爭勃發スルヤ之等ノ人々ハ始メテ自己ノ認
識不足ヲ認メタガ、シカシ今日ニ至ツテ日本ノ西南太平洋ノ攻略カ
最高潮ニ達シソノ使用兵力亦飽和點ニ達シ兵ノ銳氣衰ヘ兵力分散シ
事實上主動的攻勢ヨリ受動的守勢ノ地位ニ變シ、日本ノ局力逆轉
セントシツツアル情況下ニ於テハ、之ノ事力却ツテ烈日病者ヲシテ
西南太平洋ノ戰局ハ一段落ヲ告ケタト誤認セシメ且ツ敵力近時漸衰
ニ對シ兵ヲ進メツツアル爲ニ又々日本ハ大舉中國ヲ攻略スルノ可能
性カアルト認メテキルカ其ノ見解ノ幼稚ナルコトハ實ニ笑フヘキモ
ノガアル。實際ヲ言ヘハ日本ノ失敗ハ早クモ滿洲事變ノ勃發ノ際ニ
確定的トナツタノデアツテ現在如何ナル方向ニ向ツテ攻勢ヲ取ツテ

モソレハ結局死地ニ陥ツタ者カ最後ノ足掻キヲスルニ過キナイモ
ノテアル。

我々ハ日支事變モ現段階ニ迄進ンテハ既に世界戰爭ノ一構成分子
トナツタモノデアツテ絕對ニ單ナル兩國家間ノ戰爭テハナイ、換
言スレハ日支事變ハ既に第二次世界大戰中ノ一環トナツタコトヲ
知ラネハナラヌ、今日ノ世界ニハ民主國家群ト樞軸國家群トノ二
陣營シカ存シナイ。

同一戰線上ニ立ツ各國ハ互ニ苦樂ヲ共ニスルト言フ不可分ノ關係
ヲ有シ勝テハ俱ニ存續シ敗レハ俱ニ滅亡スル故ニ我々ハ甲國若シ
クハ乙國ノ一城一地ノ得失ニ基イテ全局面ニ對シ遽ニ判斷ヲ下シ
葦ノ隨カラ天井ヲソクカ如キ誤謬ヲ犯スニ至ラサル様注意セネ
ハナラヌ。部分的戰場ノ勝敗カ全局ノ勝敗ヲ決定シ得ナイモノテ
アル以上日本ノ中國ニ於テノ或ル時期或ル地域ノ局部的攻勢ト勝
利トハ如何ニシテ樞軸國家ノ全般的ナ失敗ノ運命ヲ挽回スルコト

カ出來ヨウカ。シカノミナラス事實上日本ハ中國戰場ニ於テモ又ハ太平洋戰場ニ於テモ均シク兵力分散シテ足掃キノ取レナイ苦境ニ陥ツテキルノテアルカラ絶對ニ勝算ノ可能ハ無イノテアル。故ニ我々ハ日本ノ今後中國ニ於テノ動向ニ就イテ獨大ナ評價ヲナシテ不安ノ念ニ驅ラレル必要ハナイノテアル。日本カ中國ニ對シ何カ途方モナイ政勢ニ出ルノテハナイカト考ヘテキル人々ハ余ノ目カラ見レハ單ニ神經過敏ナハカリテハナク實ニ愚人ノ杞憂ニ過キナイノテアル。

日本ノ失敗ノ必然的ナコトハ滿洲事變ノ勃發ノ時ニ早クモ確定的ナモノトナツタト前述シタカ、ソノ理由ハ即チ日本ハ戰前ニ於テ中國ニ對スル評價ヲ全ク誤リ失敗ノ基ヲ作ツテ了ツタカ爲テアル先ツ第一ニ政治的觀點ニ於テ根本的ナ誤謬ヲ犯シタ、日本ハ中國近代史ヲ研究シテ宋ヲ滅シ清カ明ヲ滅シタ例ヲ見更ニ清朝末期ニ於テソノ外交軟弱ヲ極メ帝國主義ノ武力壓迫ニ支配サレタ情況

ヲ見テ直チニ中華民族ハ容易ニ征服シ得ル民族テアルト考ヘタカ何ソ知ラン日本ノ見タノハ單ニ歴史ノ表面テアツテ事實ノ真相テハナク日本ハ單ニ過去ノ中國ノミヲ見テ現代ノ中國ヲ理解シナカッタノテアル。誠ニ中國近代史上ニ於テハ二度ニ亘ツテ民族ノ侵入ヲ受ケタシカシ之ハ實ニ當時ノ君主專制カ民衆ヲ領導スルコトカ出來ナカッタコトカ、敵ノ乘ス可キ機會ヲ招致シ如上ノ事實ヲ我々ノ眼前ニ展開シタノテアツテ、現在ノ中國ハ絶對ニ南宋明末ノ時代ニ比シ得ヘキモノテハナイ。滿清末期ニ政治腐敗シ相繼イテ帝國主義ノ侵略ヲ受ケタ事ニ至ツテハ舊ニ之ノ事カ中國民衆ノ精神カニ打撃ヲ與ヘ得ナカッタノミカ反對之等ノ悲惨ナル教訓ニ依ツテ中國民衆ノ民族意識カ刺戟サレ、更ニ國父孫中山先生ノ三民主義思想ノ薰陶ヲ繼イテ總裁蔣介石先生ノ領導ヲ經テ中華民族ハ早クモ迷夢ノ中ヨリ覺醒シ來リ新ナル活力ヲ生シタノテアル。今日賢明ナル領袖ト革命政權トノ下ニ於テ全中國民

衆カ勇敢ニ日本帝國主義ノ侵略ニ抵抗スルコト斷ニ五ヶ年ノ久シ
キニ至ツタト言フ。斯カル一致團結共同奮起シ以テ民族ノ解放ヲ
求メル力量カ即チ中國ノ不敗不亡ノ保證ナノテアツテ日本ハ客觀
的ナ眼ヲ以テ之等ノ因素ヲ分析スルコトハ出來ス。遂ニ政略上ノ
根本的錯誤ヲ招致シ之カ必然的ニ政略上ノ失敗ニ影響ヲ及ホシタ
ノテアル。

物資不足セル日本カ長期戰ヲ支持スル條件ト四面敵ヲ受ケツツア
ル形勢トヨリ考ヘデモ對支戰爭ハ當然「速戰速決」ト言フ戰略ヲ
取ラネハナラヌ。斯カル戰略ノ要求ヲ滿タス爲ニハ絕對優勢ナル
兵力ヲ用ヒテ一舉ニ事ヲ完成セネハナラヌ。シカシ日本ハ兵力ノ
逐次使用ト言フ誤謬ヲ犯シ根本的ニソノ作戰指導ノ最高原則ニ違
反シタ。爲ニ單ニ所期ノ戰果ヲ得ケ得ナカツタノミカ中國ヲシテ
反ツテ部署ヲ整備シ動員ヲ完成シテ着々抵抗力ヲ養ヒ持久戰消耗
戰ニ出テテ時間ヲ以テ空間ニ換ヘルト言フ目的ヲ達セシムル結果

トナツタ。之ニ反シ若シ日本カ最初數十ヶ師團ノ兵力ヲ一時ニ動
員シ黃河、揚子江、珠江ノ三流域ニ向ツテ進撃シタトスレハ、當
時我々ハ準備未タ完了セス惶惶トシテ應戰セネハナラヌ。情況ニ在
ツタノテアツテ其ノ結果ハ想像ニ余リアルモノカアル。

日支戰爭カ持久戰ニ陥ツタ時ニ於テ日本ハソノ失敗ノ悲哀ヲ掩蔽
センカ爲ト樞軸側ノ作戰ニ呼應センカ爲ニ南進ヲ敢行シタ。之ハ
事後ニ於テ前過ヲ改メンカ爲ノ對策テアル。戰術上日本ハ電撃作
戰ヲ用ヒタ。之ハ近代ノ軍事の要點ヨリ見レハ相當正確ナモノテ
ハアルカ。シカシ惜シイカナ日本ノ將校ニハ英邁ナル戰略的天才
ニ缺乏シテキル日本ハ既ニ時機ヲ擱ミ決死ノ覺悟ヲ以テ南進政策
ヲ行ヒ更ニ「ヒットラー」ノ電撃作戰ヲ模倣シタカ。シカシ兵力
ノ使用ニ於テ一大偉力ヲ以テ一舉ニ敵ヲ擊滅シ以テ其ノ偉大ナル
戰略的企圖ヲ達成スルト言フ力カ備ハツテキス。依然トシテ中國
ノ戰場ニ於テ犯シタト同様ナ戰略的誤謬「兵力ヲ逐次使用シ遠

大ナル計劃ニ基ツク攻撃目標ヲ持タナイニ陥ルヲ免カレス。斯ナル情態ヲ以テ如何ニシテ偉大ナル成果ヲ擧ゲ得ルテアラウカ假令日本カ南進ノ緒戦ニ於テ幾何ノ艱難ヲ擧ゲ幾多ノ地ヲ占領シタトハ言ヘ、シカシ未タ印度攻撃臺灣大陸侵略ノ目的ハ達成サレテオス單ニモウ一方ノ足ヲ又モ南洋ト言フ泥沼ノ中ニ踏込シタニ過ギナイノテアル。

我々カ日本ノ立場ニ立ツテ考ヘレハ日本カ南進ヲ開始セル當初ニ於テ最高度ニ力ヲ集中センカ爲ニ當然支那ニ於テ占領シタ廣大ナル據點ヲ放棄シ戦線ヲ短縮シテ大膽ニ在支戰場ノ兵力ト「ソ」聯ニ備ヘツツアル部隊ヲ轉用シ、ソノ全力ヲ擧ケ英米ノ不備ニ乘シテ「フイリツビン」馬來半島及ヒ印度等ノ地ニ進撃ヲ開始スルノト機ヲ同シウシム。大膽「ビルマ」印度及ヒ濟本土ヲ進攻スヘキテアツタ。若シ日本軍部カ斯カル計劃ヲ建テ斯クモ偉大ナル氣魄ヲ持チ得タナラハ誠ニ史上ニ驚天動地ナ新ナル頁ヲ加ヘルニ難ク

ナイ。單ニ英米ト濠洲ノ連絡ヲ切斷シ得ルノミナラス更ニ英米ノ太平洋印度洋ニ於ケル一切ノ勢力ヲ驅逐スルコトカ出來、單ニ英米ノ太平洋ニ於ケル反撃ノ基地ヲ破壊シ得ルニ止マラス尙且ツ英國ノ東洋ニ於ケル生命線印度ヲ攻撃シ得タアラウ。太平洋印度洋カ完全ニ日本ノ手ニ依ツテ支配サレタル際ニハ「スエズ」運河ハ切斷サレ地中海モ亦死セル湖ニ等シクナル。勢ヒ米國ハ退イテ其ノ本土ヲ守ラネハナラナクナリ、且ツ南米ノ東西沿海諸國ニ對シテモ必ス積極的ニ防備ヲ施シ以テ樞軸側ノ進攻ヲ防カネハナラナクナル。又戰略及ヒ政略ノ上ヨリ言ヘハ同盟國ハ隔離サレ受動的ナ最モ不利ナ形勢ニ迫込マレルカ、樞軸國家側ハ之ニ反シ、印度及ヒ「ベルシャ」灣ヨリ「イラン」ニ出テ「ナチス」ト中央亞細亞ニテ手ヲ結フ態勢ヲ取ルコトカ出來ル。北方ニ向ヒ「ソ」聯ヲ攻撃シ捕虜ヲ擧取シ「バイカル」湖ヲ越エテ「ナチス」ト「ウラル」山ニ於テ手ヲ結フ事カ出來ル。攻守ノ策ハ自由ニ變更スルコトカ出來中國ノ外援ハ切斷

サレ包圍ヲ蒙ルト言フ苦境ニ立至リス。テ樞軸側ハ完全ナル勝利ノ態勢ヲ整エル事カ出來ルノテアル。日本カ斯卡ル計劃ヲ持タナカツタコトハ實ニ眼前ノ小利ト遠クヲ見ル眼ヲ持タナカツタコトニ基因スルモノテアリ、中國ト言フ泥沼ニ落込シタ兵力ハ之ヲ使フニハ使ヘス、サレハト言ツテ之ヲ放棄スルニハ余リニモ惜シク、斷乎トシテ此ノ泥沼ヨリ足ヲ抜イテ之ヲ南進ニ轉用出來ナイハカリテナク「ナチス」カ「ソ」聯ヲ猛攻セル時ニ當ツテモ亦小心整々トシテ敢テ「ソ」聯ニ備ヘツツアル部隊ヲ南進ニ轉用シ以テ濠洲ト印度トヲ一舉ニソノ傘下ニ收メル事ガ出來ナカツタコトハ實ニ失敗ノ極テアル。今ヤ日本ノ好機ハ去ツテ了ヒ同盟國ハ既ニ大冊ノ兵力ヲ輸送シテ印度濠洲ノ防備ヲ増強シタノミナラス且ツ戰線上ニ於テモ逐次消極的防禦ヲ積極的反攻ニ轉スヘク準備ヲ急ギツツアル。印度濠洲ニ依ツテ挾マレテギル軍略的地點ハ充分太平洋ノ全局ヲ支配シ日本ヲシテ内線作戰ノ不利ナ態勢ヨリ脱却シ得サラシメルモノテアル。今ニ至ツ

テハ日本ハ既ニソノ有スル限りノ力ヲ使ヒ盡シ、侵略セル各地ニ分駐シテキル兵力ヲ動カシテ集中的ニ使用スルコトハ出來ナクナリ勢ヒ守勢ニ立タサルヲ得ス、至ル處ニソノ弱點ヲ暴露シテキル。故ニ支那戰線タルト太平洋戰線タルト將亦對「ソ」一防備クルトヲ問ハス。今後日本ニハ絶對ニ大規模ノ決定的攻勢ニ出テル力カ無ク且ツソノ陸海軍力ハ斷ヘス消耗サレモノテアルト斷言シ得ル。現在ヲ境トシテ日本ハ坂ノ頂上ヨリ漸次轉落スルモノト見ラレ。夕陽ハ限リナク美シイカシカシソレハ黃昏ノ間近キ事ヲ物語ル。之ハ實ニ最も適切ニ日本ノ現狀ヲ表現シテキル。更ニ又廣ク古今中外ノ歴史ヲ觀スルニ軍國主義ヲ奉スル侵略者ニシテ其ノ結果失敗セザルハナイ何ントナレハ侵略者ハ全人類ノ福利ヲ蹂躪シソノ野蠻ナル兵ハ暴戾ヲ恣ニシテ狂氣的ナ獸性ヲ發揮スルノテアルカラ當然人類ノ公敵トナリ從ツテ失敗スルノモ亦當然ナノテアル正ニソレハ所謂「千夫ノ指ス所病無クシテ死ス」ト言フ様ナモノテアツテ忽必烈「ナボレオ

シノ雄才大略ヲ以テシテモ亦僅カニ數十年ト言フ短時日ノ成功ヲ獲得シ得タニ過キス、最後ニハ失敗ヲ免レナカッタノテアル。況テ日本軍閥ニハ忽必烈「ナボレオン」ノ如キ天才ト氣線トニ缺ケテキル以上支那戰線ト太平洋戰線トニ於ケル初期ノ勝利ノ如キハ實ニ槿花一朝ノ夢タルニ過キス。失敗ノ速ナルコトハ日ヲ數ヘテ待ツヘキモノカアル。

要スルニ今日ニ於テハ我々ハ如何ナル方面ヨリシテモ明瞭ニ樞軸國家ノ必然的失敗ノ因素ヲ見出シ得ル。從ツテ絕對ニ樞軸側ノ抑下ノ一時的ナ局部的ナ勝利ニ依ツテ不安ノ念ヲ起シ必勝ノ信念ニ動搖ヲ來シ敵ノ志氣ヲ盛ナラシメテ自己ノ威風ヲ萎靡セシメルカ如キ事アツテハナラナイ。之ハ敗戰主義的ナ思想テアツテ當然徹底的ニ肅清ヲ加フヘキモノテアル。余ハ國內國外人士カ理致階ニ於ケル反侵略戰爭ノ新ナル形勢ニ對シテ個ノ新ナル認識ヲ持タレシコトヲ切望シテ止マナイ。

完

日本戰時經濟政策ヲ論ス

郵松光

(重慶「日本評論」三月號所載)

一 前言

抗戰第五年ニ到リ從來近代強國ノ其本的要素タル天然資源(特ニ鐵鋼資源、石油資源)ニ缺之スル敵國ハ我國ノ長期抗戰ト英米ノ經濟制裁トニ因リ經濟ノ上ニ未嘗有ノ危機ヲ現出シツツアル。例ヘハ軍需工業ニ於ケル生産力ノ減退、物價昂騰、日ト共ニ深刻化シツツアル通貨膨脹、輸出貿易ノ不振、莫大ナル公債ノ消化不良及ヒ巨額ナ戦費ノ調達難等々ノ如キハ何レモ敵國經濟力正ニ崩潰ニ瀕シツツアルコトヲ示シテキル。故ニ敵國ノ經濟政策ハ疑ヒモナク中華民國內閣略戰爭ニ依ツテ惹起サレタ經濟危機ヲ持ハンカ爲ノ一環ノ應急手段ナル。例ヘハ敵國ノ戰時産業對策ノ如キモ我國ノ抗戰力敵ノ貧乏ナル軍需生産力ヲ其ノ莫大ナル軍需品ノ消耗ニ應シ切レナクシタートニ基イテノ「苦シイ時ノ神劍」式ノ應急策ナノテアル。

同様ニ其間ノ貿易政策、物價政策、金融政策、財政政策等ニ至ル迄一トシテ我國ノ抗戦力感ニ與ヘタ國內經濟危機ニ對處スル應急措置ニ非サルハナイ、從ツテ我國四年來ノ重戦ナル抗戦ノ成果ヲ知ラントスル場合、或ヒハ中華民國略略戰爭ニ依ツテ敵國カ自ラ招致シタ經濟的破綻ヲ觀察セントスル場合我々ハ其ノ經濟動靜ニ對シテ決定的作用ヲ有スル經濟政策ヲ正確ニ見極メル必要カアル、以下敵國ノ最近ノ産業政策、貿易政策、物價政策、金融政策、財政政策ニ就キ吾人ノ認識ノ範圍内ニ於テ概括的ナ論述ヲ試ミル

三 戰時産業政策

戰時産業政策トシテハ第一ニ軍需資材ノ供給ヲ確保セネハナラス第二ニ之ノ軍需資材ハ是非トモ國內軍需工業力其ノ供給ノ責ヲ負ハネハナラヌカシカシ重工業ノ未發達ニ加フルニ土地狹隘ニシテ天然資源、勞働力共ニ不足セル日本ハ四年間ノ長期消耗戰ヲ經タル今日ソノ貧弱チル軍需産業ノ生産能力ヲ以テシテハ到底今後ノ莫大ナル消

耗ニ應スルコトハ出来ナイ、從ツテ敵國ハ其ノ國內軍需産業生産力ノ擴充ヲ計ラサルヲ得ス既ニ實施セル對策ニシテ吾人ノ探知シタモノハ大体次ノ如キモノカアル

(一) 物資動員計劃

此ノ計劃ハ昭和十三年六月ニ作成サレ爾後コノ計劃ニ依ツテ戰時經濟ヲ運行スルコトシタ、此ノ計劃ハ更ニ毎年國內物資ノ需要供給、輸出入等ニ關シタ々ノ計劃ヲ樹テ、以テ一切ノ物資動員ノ基礎トスル

(二) 生産力擴充計劃

此ノ計劃ハ日本ノ第七十四議會ニ於テ發表サレタ企劃院ノ作成ニ係ル生産力擴充四年計劃テアツテ、日本ハ此ノ計劃ニ基イテ國防産業及ヒ基礎産業ヲ或程度擴充セント企圖シテキル

(三) 勞働對策

生産力擴充計劃ニ於テ最も切迫セル要求ハ先ツ第一ニ資材ト勞働

力ノ補給テアリ、從ツテ日本ハ重要産業ニ對シ優先的ニ資材ヲ供給シ、更ニ一歩進ンテ全面的國家總動員法案ヲ實施シ、國民職業能力登錄令、從業員傭人雇用制限令及ヒ就業時間制限令等ノ如キヲ相繼イテ公布シ勞働力不足ノ對策ヲ樹テタ、此ノ外更ニ熟練工ノ補給ニ關シテモ學校技能者及ヒ工場技能者ノ養成令ヲ發布シタ、前者ハ文部大臣カ學校又ハ養成所ニ對シ技能者ノ養成ヲ命スルコトカ出來、後者ハ厚生大臣カ工場主ニ對シ技術者養成ノ義務ヲ課スコトカ出來ルモノデアツテ、之等種々ナル措置ハ一トシテ優先的ニ勞働力ヲ重要産業ニ供給シ比較的重要テナイ産業ニ對スル供給ヲ制限センカ爲ノモノデアル

(四) 轉業對策

轉業トハ即チ原料輸入制限及ヒ重要物資ノ配給制限ニ依ツテ職ヲ奪ハレタ輕工業從業員ノ轉業問題デアツテ、其ノ對策トシテハ先ツ第一ニ中小工業ノ組織化、資金設備上ノ補助等ノ實施デアリ、

次ハ中小工場ノ滿洲移轉ノ獎勵デアル

日本カ其ノ生産力ヲ擴充センカ爲ニ組織テ實施シタ各種措置ハ上述通りテアルカ、シカシ生産力ノ擴充ヲ進メテユク過程ニハ幾多ノ困難ノ生スルヲ免カレナイ、即チ

(一) 日本ハ最近歐洲戰争ノ影響、英米ノ經濟封鎖、資金凍結令ノ頒行及ヒ在華兵士ノ多數ノ死傷等々ノ關係ニ依リ其ノ國內資材、原料、勞働力等ハ日益ニ缺乏ラ告ケ爲ニ日本政府ハ全面的ナ生産擴充政策ヲ放棄シテ効率ノ高度ナル會社及ヒ工場ニ集中的ニ生産擴充ヲ施行セサルヲ得ナクナツタ、斯ガル情況ノ下ニ於テ歐國ハ假令資材及ヒ勞力ノ効率ヲ高メテ局部的ナ生産力ノ擴充ニ成功シタトハ言ヘ、全体的ニハ却ツテ効率ヲ低下セシメ且ツ中小工場ノ生産力ヲ益々減少セシメタ、商工省ノ調査ニ依レハ昭和十三年末ニ於テ戰時ノ犧牲トナツタ輕工業業主ハ八萬八千名、之レカ從業員三十七萬四千名デアツ

デ、且ツ物資統制ノ強化ニ依リ今後其ノ犧牲者ノ數ハ益々増
加ノ傾向ニアルカ、實ニ之ハ日本産業政策中ノ一大問題デア
ル

(二)日本ノ低物價政策ハ實ニ生産力擴充ノ最大障礙デアリ、第七
十五議會ニ於ケル財界方面ノ意見カソレテアツタ、シカシ乍
ラ若シ低物價政策ヲ實行シナケレハ戰時物價對策ノ破綻ヲ來
ス恐レカアリ、木内内閣時代ニハ大規模ナ獎勵金政策ヲ取ツ
タコトカアツタカソノ結果ハ通貨膨脹ヲ促進スルニ過キナカ
ツタ、之ハ實ニ日本ヲ一魚ハ我カ欲スル所也、熊掌モ亦我カ
欲スル所也」ト言フ「デレンマ」ニ陷レタ

(三)敵國從來ノ生産力擴充政策ハ滿洲ヨリ其ノ必要トスル資材及
ヒ原料ヲ獲得シ得ルト云フコトヲ日當トシテキタカ、シカシ
實際ニハソノ様ニ思ヒ通リニナルモノテハナク、從ツテ生産
力ノ擴充ニ對シテ敵方内心安ラカナラサル思ヒヲ抱イテキル

コトモ無理ノナイ話テアル

三、貿易政策

日本ノ國際貿易ハ日支事變勃發以後戰時統制ノ段階ニ入ツタ、ソノ
第一歩トシテ先ツ國際貿易管理辦法ノ實施ヲ強化シ續イテ輸入爲替許
可制ヲ實施シテ國際貿易ヲ直接統制シタ

昭和十二年七月ノ特別議會ニ於テハ更ニ貿易及ヒ産業ノ調整法ヲ制
定シ、同年八月之ヲ擴大強化シテ輸出入品臨時措置法ヲ制定シ、軍
需生産力擴充以外ノ爲ノ資材ノ輸入ヲ抑制シ入超増大ノ傾向ヲ阻止
シ且ツ國際收支ノ均衡保持ヲ期シタ、シカシ乍ラ單ニ輸入ヲ制限シ
タノミテハ殆トノ資源ヲ國外ニ仰イテキル日本トシテハ其ノ必要ト
スル軍需資材ノ供給ヲ確保スルニ難ク爲ニ昭和十四年以後從來ノ消
極的輸入統制ヲ改メ積極的ナ輸出振興政策ニ轉シ輸出力ノ増大ニ依
ツテ輸入力ノ強化ヲ求メント企圖シ、之カ爲ニ日本ハ相繼イテ次ノ
如キ種々ナル方法ヲ講シタ

(一) 聯繫制ノ整備 第一ニハ商品ノ聯繫制整備テアツテ此ノ制度ハ輸出ト輸入ノ聯繫ヲ保持センカ爲ノモノテアリ輸出品製造ニ必要トスル原料ノ輸入ヲ許可スル一種ノ制度テアル、第二ニハ特殊聯繫制ノ整備テアツテ輸出額ノ限度内ニ於テ輸出品製造又ハ加工ニ必要トスル原料ノ輸入ヲ許可スル所ノ特殊聯繫制テアル

(二) 國際爲替基金制度ノ確立 昭和十四年七月日本銀行ノ準備金中ヨリ三億圓ヲ支出シテ國際爲替基金ヲ設置シ輸出品ニ必要トスル原料購入ノ資金トナシタ

(三) 輸出品製造用原料配給會社ノ設立 之ハ輸出品製造ニ必要ナル原料ノ配給ヲ圓滑ナラシメンカ爲ニ八大都市ニ設立サレタ組織テアル

(四) 貿易金融ノ改善 即チ輸出資金損失補償金ノ貸與制度及ヒ輸出補償法施行規則ヲ修正シ、且ツ本制度ノ適用ヲ輸出業者ヨリ輸出品製造業者ニ迄擴大シ、輸出品製造資金損失補償貸與制度ヲ制定シ

以上カ即チ日本方其ノ輸出振興策トシテ相繼イテ實施シタ措置テアルカ、シカシ國內物價ノ昂騰、原料、資材、勞力ノ不足、加フルニ國際間ノ不調ノ日甚并及ヒ資金決済ノ實施等ノ關係ニ依リ單ニ對滿輸出ノ増加ヲ見タニ過キス、外國資金ヲ獲得シテ必要トスル資材ヲ購入スルマデニハ却ラス徒ニ國內物資ノ不足ヲ深刻化シタニ止マツタ

四 物價對策

日支事變勃發後ニ於ケル日本ノ戰時物價對策ハ大體之ヲ四段階ニ分ケルコトカ出來ル

第一期ハ戰爭勃發ヨリ昭和十三年六月迄ニ此ノ時期ニ於ケル最も重要ナモノハ戰時暴利取締ノ強化、物價暴落ノ抑制、買需メ賣惜ミノ嚴禁及ヒ經濟警察制度ノ實施等テアル

第二期ハ昭和十三年六月ヨリ十四年四月迄ニ此ノ段階ハ一評價の時

148

期「トモ稱スヘキ時テアツタ總ユル物品ノ販賣ニ對シ其ノ最高價格ヲ評定シタ
第三期（昭和十四年五月ヨリ同年九月迄）此ノ時期ハ戰時適正價格ノ準備時期テアツタ、昭和十四年政府ハ漸平トシテ中央物價委員會ヲ大改組シ更ニ進ンテ戰時物價統制機構ノ擴充ヲ計劃シタ、中央物價委員會ニ於テハ同年物價統制大綱ヲ制定シ該大綱ニ依ツテ物價ノ昂騰ヲ抑制シ、且ツ綜合的計劃的ニ物價ヲ構成スル一切ノ要素ヲ探求シ、原價計算ヲ基礎トセル戰時適正價格ノ實現ヲ企圖シタ、此ノ外更ニ需要供給關係ノ調整ヲ實施シ以テ戰時物價政策ノ確立ヲ計劃シタ
第四期上述セル適正價格ノ全面的決定ハ一面相當ナル時間ヲ必要トスルト共ニ、他面歐洲戰爭ノ勃發ニ依ツテ生シタ世界的通貨膨脹ニヨリ物價ハ益々暴騰ノ傾向ヲ示シタカ爲ニ、日本ハ同年九月國家總動員法第六、十一、十九ノ各條ヲ發動シテ未加工食料品以外ノ一切

ノ商品ニ對シテハ勿論運送費、保險費、保管費、加工費、家賃、地代、月給、賃金等凡ソ價格的性質ヲ有スル一切ノモノニ對シテモ其ノ價格ヲ昭和十四年九月十八日ニ決定シタ標準價格以上ニ上ケ得サルコトヲ命ジタ、上述セル所ヨリシテ日本ノ戰時物價對策ハ其ノ全力ヲ上ケテ低物價政策ノ實施ニ努力シテキルコトカ分カル、シカシ乍ラ中國侵略戰爭勃發以來ソノ豫算ハ日ト共ニ莫大化シ結局赤字公債發行ノ一途ヲ辿ラサルヲ得ス、加フルニ大規模ナ生産力ノ擴充ニ嚙ツテ國外ヨリノ輸入モ亦激増シ惡性「インフレーション」ハ遂ニ其ノ必然的ナ結果トナリ、日本ノ低物價政策ハ根本的ナ困難ニ逢着スルヲ免カレナカツタ、歐洲戰爭勃發以來物價ノ昂騰ハ全世界ノ普遍的現象トナリ之カ日本ノ物價政策ニ對シ日ト共ニ無限ノ困難サヲ與ヘ單ニ物價ノ昂騰ヲ抑制シ切レナクナレルノミナラス暗取引ノ横行ヲ來シ敵國ノ經濟危機ノ一基底ヲ形成シタ、テアル

五 金融政策

日本戰時金融政策ノ第一問題ハ即ち毎年發行スル巨額ナ公債ノ消化生産力擴充資金ノ調達、對滿、對南京中央政府投資ノ圓滑ナル供給等テアル

日本ノ公債消化問題ニ就テハ周知ノ如ク日本ガ年々巨額ナ發行高ニ上ル公債ヲ消化スル見地ヨリ先ツ第一ニ所謂低金利政策ヲ採リ之ヲ以テ公債市場ノ維持及ヒ販路ノ促進ヲ計劃シ、同時ニ銀行、信託會社、保險會社、貯蓄部及ヒ共済組合等ヲ利用シテ公債購入ヲ誘導シ此ノ外更ニ小額公債ヲ發行シテ國民ノ公債購入ノ獎勵ニ資シタ、昭和十四年ノ秋以後資金ノ需要力一般的ニ高マツタカ爲ニ低金利情勢モ亦之ニ隨ツテ若干ノ變異ヲ生シ公債ノ實行キハ全ク振ハナクナツタ、斯カル情勢ノ下ニ於テ日本カ公債消化政策ニ對シ絶對的強制手段ヲ取ルコトハ誠ニ勢ノ趨ク所必然的傾向ト言ハネハナルマイ
次ニ生産力擴充資金ノ調達ニ關シテハ即ち昭和十二年九月ニ實施セル臨時資金調整法ニ依リ統一的ニ調達シテソノ需要ニ應シタカ、十

四年ノ秋以來通貨膨脹シ好景氣到來セル爲ニ投機資金ノ需要ノ増大ニ伴ツテ銀行ノ貸出モ亦日ト共ニ増加シ、爲ニ生産力擴充資金ノ調達ハ困難ニ達着シタ

對滿及ヒ對南京中央政府ノ投資ハ敵ノ經濟的掠奪ノ増加ニ伴ツテ増加シ來タリ、昭和十四年ノ對滿及ヒ對南京中央政府投資ハ十八億圓ノ巨額ニ上リ、昭和十六年ニハ更ニ六億六千四百萬圓ノ激增ヲ示シタ、斯カル巨額ナル資金ノ流出ハ確カニ其ノ國內生産力擴充資金及ヒ其間ノ資金ニ對シ一種ノ壓制的作用ヲ有スルモノテアル、之カ爲ニ日本金融界方面ニ於テハ現地調達主義ヲ堅持シ、昭和十四年十二月東京ニ於テ開催セル東亞經濟懇談會ニ於テモ國內金融界ハ執拗ニ此ノ主張ヲ反復シタ、ジカシ我國游擊隊ノ淪陷區内ニ於ケル活躍ハ敵ノ斯カル理想ヲ「木ニ縁ツテ魚ヲ求ムル」ニ等シキモノタラシメルノテアル

日本金融政策ノ第二ノ問題ハ通貨政策ノ實施テアル、日本ノ主ナル

通貨政策ハ政府發行ノ巨額ナル公債ヲ日本銀行ニ引受ケサセ、之ヲ以テ以前ニ發行シタ通貨ヲ回收シ准シテハソレノ過度ナ膨脹ヲ抑制シ物價ノ昂騰ヲ抑エ、更ニ其他ノ一切ノ通貨ノ弊害ヲ除去セントスルモノデアアルカ。シカシ日本ノ通貨ハ日支事變勃發以來急速ナル膨脹振リヲ示シ、特ニ昭和十四年以後コノ傾向ハ益々顯著ナモノトナリ、昭和十五年ニ至ツテ制限外ノ通貨發行カ普通ノ狀態トナリ、通貨ノ膨脹抑制ハ日本朝野力特ニ重視スル一ノ重大問題トナツタ、茲ニ於テ流動資金ノ抑制、購買力ノ吸收、強制貯蓄及ヒ金融政策ノ變更等ノ實施ヲ主張シ以テ通貨ノ過度膨脹ノ解決方策トナシタ

六 財政政策

日本ノ財政政策ハ大体三ツノ部門ニ分ケテ説明スルコトカ出來ル
(一)莫大ナル公債ノ消化 日本カ巨額ニ上ル中國侵略ノ戦費ヲ調達スル爲ノ唯一ノ方法ハ即チ莫大ナル公債ノ發行テアル、公債ノ消化カ圓消ニ行クカ行カヌカハ實ニ日本財政上ノ中心の問題デアツテ

日本カ相繼イテ低金利政策、資金調整法、大藏省預金部資金ノ動員、金融機關ノ統制強化及ヒ郵便局ノ小額資金ノ吸收等々ノ措置ヲ講シ之ヲ以テ具ノ大部分ノ資金ヲ公債消化ノ爲ニ集中セント企圖シタノモ無埋カラヌ事テハアツタカ、シカシ公債發行ノ無制限ナ増加ニ依リ昭和十四年ノ下半期ニ至リ日本ノ公債消化ハ全ク飽和狀態ニ達シテ了ツタ

(二)税額増加及ヒ税制ノ改革 支那事變勃發後日本ハ既ニ數次ニ巨額ノ増稅ヲ實施シタカ。シカシ戦費ノ過度ナ膨脹ニ依リ、限り有ル源泉ヲ以テ限りナキ需要ニ應シ切レナイ情勢トナリ、加フルニ臨時利得税、臨時租稅徵收法、北支事件特別税、臨時租稅措置法、支那事變特別税及ヒ基本税等々カ重複セル關係上昭和十五年斷乎トシテ大規模ナ増稅及ヒ税制ノ根本的的改革ヲ實行シタ

(三)財政ノ根本的調整 昭和十四年ニ至リ歐洲戦争ノ影響ニ依リ物價ハ益々缺乏シ又公債消化不良、惡性「インフレーション」、物價ノ全面的

昂騰等ニ依リ單ニ増税及ヒ税制改革ノミヲ以テ巨額ノ戦費ヲ調整スルハ正ニ煤石ニ水ノ懸アルヲ却カレス、生産力、輸入力ノ點ニ不足シテキル日本ハ自身ノ節約及ヒ支出緊縮ヲ實行シ財政ノ全面的調整ヲササルヲ得ナクナツタ

七 結 語

上述セル所ヲ綜合セハ我々ハ次ノ如キ結論ヲ得ルコトカ出來ル、
 (一) 軍需工業ノ生産力需要ニ應ジ切レナイコトヨリシテ、ソノ對支作戰ノ莫大ナル消耗ハ生産力ノ擴充ヲ計ルコトヲ以テ戦時産業ノ對策トセサルヲ得サラシメタカ、シカシ生産力ノ擴充ニモ小資材、勞力ノ不足、勞働力ノ質的低下等ノ如キ重大ナル阻碍カアリ、遂ニ日本ノ一般中小工業ヲシテ支離滅裂ノ境地ニ陥レタ
 (二) 日本貿易ハ初メ輸入ノ制限ヲ行ヒ繼イテ對外輸出力ノ増強ニ力ヲ注キ以テ戦時必需品ノ輸入獲得ニ努メタ、シカシ國內物價ノ昂騰國際間ノ日貨排斥ニ逢着スルヤソノ結果ハ益々專志ト違フモノハ

カリテアツタ

(三) 物價ノ昂騰ハ通貨ノ膨脹ニ原因シ通貨ノ膨脹ハ巨額ナル公債ノ發行ニ原因スルト言フ様ニ、ソノ根元ニ溯レハ日本ノ中華侵略力必要トスル莫大ナル戦費カ根本原因テアル、從ツテ中華侵略戦争ヲ止メスシテ低物價政策ヲ講セントスルコトハ實ニ痴人ノ夢タルニ過キナイ

(四) 日本ノ金融政策ニハヤレ巨額ナル公債ノ消化テアルトカ、ヤレ生産力擴充資金ノ調達テアルトカ又ハ對滿資金ノ圓滑ナル供給テアルトカ等々カ數ヘラレル、シカモ日本ニ於テハ役機事業カ横行シ役機事業ノ資金需要カ高マツテ來タカ故ニ斯カル巨額ナ資金ノ調達ハ更ニ大ナル困難ヲ伴フモノト見エハナラヌ

(五) 日本ハ巨額ノ戦費ヲ調達センカ爲ニ莫大ナル公債ヲ發行シタ外更ニ大規模ナ増税及ヒ全面的ナ財政調整ヲ斷行シタカ、シカシ敵國ノ公債消化力ハ既ニ飽和狀態ニ達シテキル、増税モ又現下ノ貧窮

セル敵國ノ良ク負擔ニ耐ヘ得ル所テハナク、全面的ナ財政調整
ニ至ツテハ敵カソノ取後ノ一掃迄持出シテモ尙戰費ノ不足ヲ感ス
ルト云フ前提ノ下ニ在ツテ如何ニスレハ支出ノ縮減カ可能テアル
ト言フノテアラウカ

要スルニ以上ノ事柄ハ一トシテ日本カソノ狂氣ノ沙汰タル中華侵略
戰爭ヲ始メタコトニ依ツテ齎ラサレタ無結果タラサルモノハナク、
若シ日本カ其ノ侵略ヲ止メサル以上斯カル未曾有ノ經濟危機モ亦解
決スルニ術ナク、且ツ其ノ全般的經濟力崩潰ノ末路ニ墮スルヲ促ス
ニ過キナイテアラウ。

完

日本ノ鐵蹄下ヨリ宗教ヲ解放セヨ

晋察冀日報社論

(一〇二三)

諸君ハ阜平西莊ノ廟宇寺院カ從來如何ニ壯麗テアツタカヲ知ツテキ
ルデアラウ、然ルニ現在ハ累々タル瓦礫ニ變シテシマツテキル、ソ
レハ一九三八年日本カ邊區ヲ掃蕩セル際燒キ拂ツタモノデアル、敵ハ
如何ナル村落ニ到ルモノノ村落中ノ廟宇及ヒ房屋ハ一様ニ一炬ノ下
ニ灰燼ニ歸シテシマフ、敵ハ其ノ聲ヲ擧ケテ來ルカ元々ソレカ廟宇
デアルカタメニ自己ノ罪業消滅ノタメニ來ルモノテハナイ、
五台山ハ我カ國佛教ノ聖地ニシテ千百年來各地ノ善男信女カ祈リヲ
揮ケ彼等ノ心血ヲ以テ守リ上ケテ來タトコロノモノテ、佛閣山閣ニ
林立シ壯嚴宏大何千何百ト云フ僧侶カ修行シ勤行シテキル、然ルニ
一度敵ニ占領セラレテヨリ悲惨ナ運命ノ中ニ投セラレ、壯麗ナル青
岩寺、台觀寺、楞提寺、益受寺等ノ八大寺ハ悉ク一場ノ瓦礫ニ變シ
テシマツタ。

五台山ノ全觀光ハ或ルハ破壊セラレ。或ルハ敵ノ砲彈ニ吹き飛ハサレテ、慘狀目モ當テラレナイ廢墟ト化シタ。佛像ハ夙クヨリソノ貌モ定ガナラス。廟宇ハ糞尿ニ充タサレ。大殿ノ中ニハ雜草茂リ煙草ノ空殻隨詰ノ空殼ナト隨處ニ散亂シ、更ニ一切ノ財物及有名ナ品物ハ悉ク敵ノ劫掠ニ空セラレ。六百兩ノ家畜モ亦何處トナク牽イテ行カレタト云フ。普濟寺貯藏ノ四十斤ノ糧穀及ヒ運搬シ得ルスベテノモノハ悉ク運ヒ去ラレ。北山寺ノ五丈ノ「字塔菩薩頂」ノ金佛某寺ノ八寶藏經、北山寺ノ人ノ血ヲ以テ寫シタト云フ金剛經其ノ他希代ノ名品モ亦悉ク中日佛敎一体化ノ名ノ下ニ失ハレタノデアル。幾多ノ人カ敵ニ慘殺サレ、殘存者ハ日々壓迫搾取欺瞞ノ下ニ直カレ、斷ラク場所モナク。敵ノ慘酷ナル苛斂ハ更ニ三千有餘ノ僧侶ヲシテソノ袈裟ヲ脱カシ地方ニ流浪セシメテキル。基督教會ハ百餘リモ破壊セラレ、神父、學生、修女等數百名ハ追ヒ出サレ。敎會ノ凡ユル財産ハ掠奪サレ、神父ニ對シテハ毒ヲ注射シ、修女ハ強姦サレ、彼女等

ヲ強イテ漢奸ニ嫁カシメテキル。晋東南ノ長治ニ於ケル敵ハ本年一月「オランダ」宣敎師ヲ殺害シ、敎會ノ財産ヲ沒收シ、婦女兒童ヲ放逐シ、又或ル村ノ神父ハ敵ノタメニ梟首セラレ。武郷上司村ニ於テハ昨年末敎會ノ劫掠ト共ニ敎徒モ壓迫セラレタ。又敵ハ回敎ニ對シテモ同様テ冀中藁無縣、南四公ニテハ昨年九民村ノ清眞寺ニ火ヲ掛ケ、火焰ハ二日モ燃マズ且ツ二名ノ回敎徒カ殺サレタコトヲ記備シテキル。更ニ下村ノ回民敎首甘俊國ハ敵ニ拉致サレゾノ生死ハ不明テアル。

敵ノ宗敎破壊ノ暴舉ハ夜壘ニ達ガナク、五年來中國ノ國土ニ於イテ佛敎、基督教、回敎及ヒ其ノ他宗敎ノ信徒ニシテ敵刃ノ下ニ死ンタモノハ其ノ數ヲ知ラナイ。侵入ナル歴史ヲ有スル壯嚴雄大ナル寺院敎會堂カ敵ノ血腥イ手ニヨツテ破壊サレタ。無數ノ寺院及ヒ敎會ノ財産ガ掠奪セラレ、何千何萬ノ敎徒カ敵ノ蹂躪ト汚辱ヲ蒙ツテキル。明ラカニコノ「ファシスト」野獸ノ心中ノ世界ハ殺風景ナ瓦礫ノ世

界テアル。自由思想、及ヒ文化、遺物ハ悉ク彼等ノ破壊ノ對象デア
リ、一切ノ宗教ヲ破壊スルコトハ早クヨリ一貫セル敵ノ漁獵行爲テ
アル。然ルニ日本ハ彼等自身ヲ以テ佛教國テアリ各種宗教ノ保護者
テアルト號シテキル。彼ノ特務ノ頭目土肥原ハ無恥ニモ自ラ「常ニ
世界文化ヲ吸收シ、印度文化ノ代表タル佛教、支那文化ノ代表タル
儒教カ國民ノ生活ノ中ニ充分維持サレ實行サレテキルノハ、印度テ
モナク、支那テモナク實ニ我カ日本帝國テアル」ト云ツテキル、「
新文化ヲ創造センカタメニ戦争ヲスル」コノ言葉コソ實ニ極度ニ無
恥ニシテ堪ヘ難イ亡者ノ言葉テアル。日本「ファシスト」匪徒ハ到
ル處ニ「佛教會」、「回教聯合會」ヲ組織シテ居ルガ、目下恰モ「
華北基督教團體協議會」ノ召集中デアリ且ツ所謂「基督教新教團」
ナルモノノ成立ヲ準備シツツアル。然シ明敏ナル教徒ハ之ヲ以テ各
宗教ニ對スル最も悲シムヘキ姿勢デアリ最も恥ツヘキ汚辱デア
トヲ知ツテキル。日本「ファシスト」匪徒ハ宗教ト彼等ノ侵略行爲

トヲ聯繋シ攻城略地、殺人放火ノ護符及ヒ共犯タラシメントシ、各
種各樣ノ方法ヲ以テ各教門中ノ教徒ヲ誘ヒ淫靡ヲ煽ケ喊聲ヲ擧ケテ
キル。最近「中國回教聯合會委員長」ヲ偽稱スル趙國棟ノ漢回民
族ノ離反、及日回親善のナル講演ハ大ノ尾ヲ振ルカ如キ異符チナラ
ヌモノテアル。北京ノ偽佛教總會裡ニ坐シテ居ル、アノ大頭ノ男ハ
何ヲシテキルノデアラウカ、日本「ファシスト」ノ走卒タル身分ヲ
以テ一切ノ人民ヲ欺瞞シ、蒙昧ニシ、誘惑シ、暗中賣國ノ行爲ヲナ
シテ居ル。目下組織中ノ「基督教新教團」モ明ラカニ亦同様ナ企圖
ノ下ニ弄スルトコロノモノテアル。
窮途末路ニ踏ミ込シタ敵ハ果次ノ邊境掃蕩破壊ニ失敗シ、百方策ニ
窮シ、遂ニ宗教ヲ利用シ特務ヲ活躍セシメテ邊境破壊ノ奇計ノ一ニ
列シタノテアル。彼等ハ孟縣ニ於イテハ封建的迷信組織ノ上流分子
ヲ買収シテ紅槍會ヲ組織シ、秘カニ「九宮道」ト稱シテ叛亂ヲ陰謀
シ、龍華、易縣、徐水、定縣等ノ地區ニハ偽佛教會ヲ組織シ成ハ一

慈善會」、「普濟會」、「金丹道」、「衣冠道」、「聖賢道」等ト
 稱シテ居ル。彼等ノ組織スルコレヲ教門ノ手段ハ卑劣極マルモノテ
 アル。彼等ハ「九宮道」ニ入ツタナラハ刀槍ハ傷ツケルコトカテキス」
 「日本軍力來テモ焼殺セス」。「佛教會」ニ入ツタナラハ災難ヲ免レル
 等人民ヲ欺瞞シ、紅槍會ニ入ラナイモノハ八路ニ私通スルモノトナ
 シ、八路ニ私通スルモノハ斷乎トシテ殺シ、教會ニ入ラサルモノハ
 眞先ニ殺ス等ノ語ヲ以テ人民ヲ恐嚇シ、以テ暴動ヲ展開シ特務ノ
 組織セル迷信的ノ教ヲ信セシメントシテキル。
 斯ル迷信的教ハ單ニ特務ヲ活動セシメ叛亂ヲ激起セシメテ邊區ヲ破
 壞セントスルノミテハナク、彼等ノ飽クコトヲ知ラサル食慾ヲ満足
 セシメンカタメノ巧妙ナル手段テアル。愚弄サレ威嚇サレテ之レニ
 加入セル人民ハ繼ヘテ強制的ニ各種各様ノ費用ヲ納メシメラレ、紅
 槍會ニ入ルニハ入會費三元ヲ要シ法衣ヲ着ルニハ八元ヨリ四十元ヲ
 要シ、禮拜テスラ金錢ヲ必要トシ、學會モ亦十五元ヲ要シ、百元テ